

なぜ
株の上手い人は
IRセミナーに集まるのか

Kabu Berry 主宰
yama

藤野英人 (投資家)

投資とは「一次情報」への愛である。
真実を知る姿勢が、人生のリターンになる。

kenmo (湘南投資勉強会)

株式投資が10倍楽しくなる本です!

なぜ株の上手い人はIIRセミナーに集まるのか

yama

星海社

396



SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに

株の上手^{うま}い人と、そうではない人とは何が違うのでしょうか。

株の上手さを決めるのは保有資産の金額でしょうか。

これまで20余年、私は個人投資家交流会やIRセミナーを運営してきましたが、その場でたくさんの、そして、さまざまな「株の上手い」投資家のみなさまと出会ってきました。

投資の世界では、資産額が大きい人が注目されがちです。書店やYouTubeを見ても、資産額の大きさを投資力を測るような空気があります。それを間違いだとは思いませんが、資産額だけで株の上手さ、投資力を判断することには、私は強烈な違和感を持っています。

たとえば、次の2人がいたとします。

25歳 時価1000万円の株式保有

50歳 時価10億円の株式保有

この2人を比べる際、25歳の若さで1000万円に達している人物の方が、株の上手い人である可能性があります。元本がいくらか、投資期間にもよりますが、この人物が50歳まで投資力を磨きながら投資を続ければ、その資産は10億円をはるかに超えているかもしれないからです。

また、ある時点の時価だけで資産額を認識してしまうと、信用取引などで大きなリスクを取っている人が「株の上手い人」に見えてしまうこともあります。しかし、それで本当に株の上手い人と言えるのかといえば、疑問が残ります。

たまたま大きく当たっただけなのか

望んだ結果を繰り返し出せているのか

リスクを十分に理解・認識できているのか

「株の上手さ」を測るうえでは、これらの点をそれぞれ考える必要があります。

では、株の上手い人とは、どんな人でしょうか。

私が考える「株の上手い人」とは、短期間で大きく儲けた人ではありません。自分の判断軸を持ち、仮に失敗してもその理由を冷静に振り返ることができ、相場環境が変わっても前向きに学び続けられる人です。

「株の上手い人」、彼らは大きく分けると2種類存在します。

一つが、言語化できない「天才」です。

長嶋茂雄さんのように、感覚的に本質をつかんでいて、本人自身もそれをうまく言葉にできないけれど、とにかく結果を出してしまう人です。なぜその銘柄を選ぶのか、なぜそのタイミングで売買できるのかを言葉で説明しきれなくても、圧倒的な勘や経験値で勝ててしまう。これが「天才」です。

もう一つが、「言語化できる投資家」です。

このタイプの投資家は、銘柄を語る深さがまったく違います。その魅力だけでなく、期待できるリターン、想定されるリスク、株価に何がどこまで織り込まれているのか、そして「どの前提が崩れたら見方を変えるのか」まで、他人が聞いてもわかるようにきちんと言葉にできます。私自身、その言語化の上手さ、巧みさ^{たく}に何度も驚かされてきました。

成長株投資、バリュース株投資、高配当投資など、手法は投資家によって十人十色です。しかし、どんな手法であっても、株の上手い人にはある共通点がある——というのが、長年数多くの株の上手い人とそうでない人を見てきた、私の結論です。

その共通点とは、「一次情報を大切にしていること」です。

本書では一次情報を、企業が発信、公表する投資家向け情報（いわゆるIR〈Investor Relations〉資料）、および、投資家を対象に企業が登壇^{とうだん}する勉強会やセミナー（いわゆるIRセミナー）とします。

I R資料には、企業が公表する決算短信^{たんしん}や有価証^{ゆうか}券報告書^{しょうほうこくしょ}のほか、決算説明資料が含まれます。

I Rセミナーとは、上場企業が個人投資家に向けて、自社の事業内容・業績・成長戦略・今後の見通しなどを説明する場です。決算説明資料やホームページだけでは伝わりにくい企業の考え方や強みを、経営者やI R担当者の言葉で直接聞くことができます。また、質疑応答を通じて、投資家が疑問に感じている点を確認することも大きな特徴です。

したがって、X (旧 Twitter) や雑誌で見かける「有名投資家のおすすめ3銘柄」といった情報は、一次情報には該当しません。企業自らが発信していないからです。SNSや雑誌で手に入る情報を鵜呑み^{うのみ}にするのではなく、企業が発信するI R資料を読み、I Rセミナーに参加し、経営者やI R担当者の言葉に触れ、自ら考えをまとめる。株の上手い人はそれを繰り返すことで投資力をさらに鍛え^{きた}、強化しています。それゆえ、彼らは投資の世界で長く生き残っているのです。

一次情報の重要性を強調するのには2つの大きな理由があります。

一つは、私自身の経験です。第1章で詳しくご説明しますが、株を始めて最初の約10年は大失敗を何度も経験し、資産を増やすどころか減らしてばかりでした。しかし、一次情報である、企業の決算短信や決算説明資料等のIR資料を直接、自分でチェックするようになって以降、成績が大きく改善し始めたのです。

もう一つは、IR資料に注がれている時間と作り手の想いです。企業で資料作成に携わるIR担当者のみなさまは、投資家に自社を正しく理解してもらえよう、多大な時間と労力をかけられています。企業の中の人々が自分たちの現状を伝えようとしているIR資料、さらに、彼ら自身が登壇するIRセミナー、これらの一次情報は自分で言語化するための大きな助けとなります。

では、なぜ私がここまで「一次情報の重要性」に確信を持っているのか。
ここで、簡単に自己紹介をさせていただきます。

私は「Kabu Berry (カブベリー)」というブランドで個人投資家交流会やIRセミナー

を主催しております、yamaと申します。

Kabu Berryは、もともと私が一人で始めた小さなオフ会でした。その後、I Rセミナーの運営が本格化したこともあり、2024年に法人化しました。これまで250社以上の上場企業のI Rセミナーを開催した実績があり、2025年は単年で151回に達しました。2026年上半年期（1月から6月）で81社、開催しており、年間でも新記録を更新しそうです。

リアル会場でのセミナー開催時の受付や財務・経理の実務などは妻に任せていますが、セミナーの企画から司会進行、オンライン配信、Webサイト作成に至るまで、Kabu Berryを始めて以来、基本的には私一人で完結させる「ワンオペ」で運営しています。気づいたら一人でもできてしまっていた、という感覚です。ので、行き届かない面もあるかと思いますが、なんとかこれまで続けてこられました。

実は、個人投資家向けの勉強会は、この数年で大きく広がっています。勉強会の形もさまざまです。参加者が銘柄をプレゼンしてその長所や短所を議論するもの、著名な個

人投資家をゲストに招いて講演していただくもの、企業を招いてIRセミナーを企画するものなど、多様な形で、さまざまな場所で実施されています。

Kabu BerryはIRセミナーを中心に開催していますが、「湘南投資勉強会」や「神戸投資勉強会」などの個人投資家発の勉強会においても存在感を年々高めており、IRセミナーの開催回数が増え続けています。

これら個人投資家が主催するIRセミナーに加え、個人投資家向けIRセミナー業界自体も、この4年で回数が3倍以上に急増するなど、大きな変化が起きています。

以前は、大手証券会社が顧客向けに開催するものが中心でしたが、その後、オンライン証券、専門メディアなどでもIRセミナー開催に進出してきました。近年では、ログミールFinanceやIRTVなど、主催者はさらに幅広くなっています。また、上場企業自らが開催するケースも増えています。

日経平均株価の上昇や最高値更新などで株式市場が活況であることも一因ですが、それ

以上に、個人投資家と企業、双方の間でIR活動の現場での「対話の重要性」に対する認識や意識が高まっていることが、こうした変化の背景にあるのは間違いありません。

このように急拡大を遂げるIRセミナーにも、さまざまな形式が存在しています。企業のプレゼンテーションがメインで、聞き手（投資家）からの質問時間が少ない（もしくはゼロの）ケースもあれば、質疑応答のための時間をしっかりと取った「対話型」のセミナーもあります。

私が運営するKabu Berryでもっとも大切に行っているのは「質疑応答」です。通常の開催では40分程度をあてる『対話型』IRセミナーにこだわっています。

この質疑応答を充実させることによって、投資家の登壇企業への理解や納得が深まるだけではありません。実は、参加している他の投資家の質問を聞くことで、「企業の評価や分析手法」について新たな視点や学びを得られるという、非常に大きなメリットが生まれます。

なぜなら、この『対話型』IRセミナーの現場にこそ言語化に秀でた「株の上手い人」が集まっているからです。

本書では、企業自らが発する一次情報にフォーカスして、IR資料をどのように読めばよいのか、IRセミナーではどこに注目すればよいのか、そして実際のIRセミナーの現場でどのようなやり取りが行われているのかを、具体的にお伝えしていきます。

私がいかにIRセミナーを企画し、数多くの企業や投資家のみならずと接する中で感じてきたことをもとに、IR資料とIRセミナーの具体的な活用法をお伝えしていくことで、これまで「なんとなく眺めるもの」だった一次情報を、自らの投資力を引き上げるための「道具」へと変えることを目指します。

「1日10分でもいいから、自らIR資料に触れてみよう」

『対話型』IRセミナーに参加して、何か一つ質問してみよう」

実際に行動へ踏み出せたら、最初はその効果を実感できなくても、時間とともに投資力が磨かれ、ご自身の資産形成に寄与するだけでなく「知的なエンターテインメント」としても楽しめるようになります。読者のみなさまにそれを体感していただけたら、これほど嬉しいことはありません。

それでは、株の上手い人が集まるIRセミナーの入口に向かいましょう。

目次

はじめに 3

第1章 なぜ凄腕投資家の本を何冊読んでも株が上手くならないのか

21

株式投資における「下ごしらえ」とは 23

大失敗 その1 SBIホールディングス 27

大失敗 その2 ダブルインバース 30

企業の一次情報をもとにブログを書き始める 33

一次情報の重要性を痛感 34

IR資料は個人投資家にとって最高のテキスト 35

1 社10分のカンタン下ごしらえ

39

1 社10分で確認、5つのポイント 41

① 会社情報（株探） 43

② 主要な指標「PER・PBR・配当利回り・時価総額」（株探） 44

③ 過去から現在への業績推移（株探） 46

④ ビジネスモデルの確認（資料） 48

⑤ 最新決算内容の確認（資料） 51

IR資料で投資を見送ることもある 53

IR資料をIRセミナーでどう活かすか 54

自分だけの「ものさし」を育てよう 55

第3章 株の上手い人が集まる『対話型』IRセミナー

59

IRセミナーの醍醐味とは 60

初心者がセミナーで答えを探すべき「4つの問い」 63

IRセミナーに参加する前の準備 65

登壇企業のプレゼンで注意したいこと 66

質疑応答(1) 質疑応答のための時間がどれだけ取られているか 68

質疑応答(2) 会社の「本質」を引き出す質問の力 70

質疑応答(3) 質問の質の磨き方 74

質疑応答(4) 他人の質問は、そのままあなたの「武器」になる 76

質疑応答(5) 企業の「魂(ビジョン)」を引っ張り出す質問 80

質疑応答(6) IRセミナーで心がけたいマナー 84

質疑応答(7) 投資力が試される「質問の変換技術」 87

帰りの電車で5分! 投資力を2倍にする「言語化メモ」 88

興奮を冷ます「フラットな視点」 90

「買わない」と決めることも、立派な一流の投資判断 92

第4章

紙上再現 『対話型』IRセミナー 95

【CLM】Kobu Berry Lab 登壇企業のコメント リアルゲイト 132

第5章

『対話型』IRセミナーの実例、いろいろ 137

日本電産（現ニデック）（6594） 138

フォースタートアップス（7089） 139

NTT（9432） 143

セレンディップ・ホールディングス（7318） 145

トヨクモ（4058） 149

第6章

実績ゼロの素人なのに、 株の上手い人が20年集まり続ける場をつくれたワケ

アップガレージグループ(7134) 151

ヨシックスホールディングス(3221) 154

ジェイエイシーリクルートメント(2124) 156

グローバル・リンク・マネジメント(3486) 159

「コラム1」 登壇企業から見た『対話型』IRセミナー 164

「コラム2」 個人投資家から見た『対話型』IRセミナー 174

誘われないなら、自分で作る——向こう見ずな性格が扉を開かせた 183

すべての始まりは、2006年5月27日、参加者15名から 186

「冬の時代」を乗り越え、なぜKabu Berryは生き残れたのか 188

まさかのオフアールと「桐谷さん降臨」 189

最大の転機は「開催2週間前のドタキャン」 192

常識を「知らなかった」からこそ生まれた、100分間のコール&レスポンス
22年勤めた会社を辞め、Kabou Berryに全集中 199

【コラム】名古屋の長期投資家（なごちよう）から見たKabou Berry 202

おわりに インベスターではなく、イベントーとして 210

第**1**章

なぜ凄腕投資家の本を何冊読んでも株が上手くならないのか

書店の「株・投資」コーナーに数多く並ぶ、凄腕投資家が執筆した投資本を何冊かお読みになったことはあります。本書を手にとってくださっているということは、ごらんになっているものと想像しています。私自身、個人投資家の交流会を主催しているので、この分野の本を多数読んでいます。最近ではベストセラーが続々と出ており、羨ましい限りです。実際、「はじめに」でご紹介した湘南投資勉強会を主催するkennoさんの著書はなんと25万部突破と耳にしました。内容が確かな良書ですので、ベストセラーになるのも当然です。繰り返しますがkennoさんの印税生活、羨ましい。とにもかくにも、個人投資家の投資環境が徐々に良くなっていることは嬉しい限りです。

しかし、これらの投資本を読んで毎度感じることがあります。それは、買いの条件や指標といった「やり方」は示されていて、その土台である一次情報、すなわち、決算短信、有価証券報告書や決算説明資料等のIR資料とどう向き合っているかという地道な「下ごしらえ」が、驚くほど雑に扱われているということです。

株式投資における「下ごしらえ」とは

料理でも、下ごしらえをしつかりしているかどうかで、味が全く変わります。株式投資でも同じことが当てはまる、つまり、「下ごしらえ」次第でその結果が大きく変わるはずですよ。それなのに、なぜ「下ごしらえ」がこれほどまでに雑に扱われてしまうのでしょうか。あくまで私の仮説ですが、投資本の場合、「読者の期待に応えようとするあまり、本当のことが見えにくくなってしまったから」だと考えています。本当のこと、とは何か、もう少し具体的に説明してみます。

凄腕投資家の本を手取る動機は、多くの場合、「何か自分にはないスペシャルな裏技的手法や着眼点と出会えるのではないか、そうすれば自分の資産も大きく増えるだろう」というほのかな期待でしょう。

これらの投資本を企画する編集者はそんな読者心理を汲み取っているので、『増配』や『高値ブレイク』といった、キャッチーな「得意技（裏技?）」をメインにした構成に仕立てていくのでしょうか。その結果、株式投資において「下ごしらえ」が極めて大事な基礎的事項である、という本当のことが驚くほど雑に扱われることになります。

ちよつと極端なたとえかもしれませんが、編集者が著名な数学者に一般向けの本を執筆依頼する際「九九から始めてください」とお願いすることはあり得ません。そもそもそんな企画が採用されるはずがありません。

九九に相当する極めて基礎的な事項が「下ごしらえ」です。

では「下ごしらえ」とは何か。端的に言えば、**一次情報、I R資料に直接触れること**です。もちろん、I R資料に直接触れたからといって、「必ずある程度うまくいく」というわかりやすい効果効能はありません。I R資料を元買った銘柄だからといって株価が上がってくれるわけでもありません。さらに言うと、I R資料をしっかりと読んでみると「買わない」「買えない」という結論に辿り着くことが多くなります。

それゆえ、裏技や必勝法を期待して凄腕投資家の投資本を手についた読者からすれば、一次情報の重要性が強調され、「下ごしらえ」の内容、やり方が丁寧に説明されていると、肩透かしを食らったように感じるのではないのでしょうか。

凄腕投資家は「下ごしらえ」を大事にしている、彼らのほとんどが、一次情報を読むのに時間をかけていると、断言できます。なぜなら、Kabu Berry に集う数多くの「億り人」、凄腕投資家たちが、この I R 資料・一次情報をしっかりと読むプロセスをサボっていないことを、私自身がこの目で見てきたからです。彼らが違いをつくる大きな要素が「下ごしらえ」なのです。

また、プロである機関投資家も、当然のことながら一次情報をしっかりと見ています。しっかりと実績ある投資家たちが注意を向けてチェックしているものに時間をかけるのは、遠回りのように見えて近道だと確信しています。

最近話題になった個人投資家なのさんの著書『マンガでわかる高配当株投資「完全入門」』(KADOKAWA)でも「投資する前に必ず会社四季報や決算説明資料などの I R 情報を確認するようにしましょう」と述べられていましたが、私はこれを読みながら「読者のみなさまはその確認の具体的な手法を知りたいのでは」と感じました。もちろん手法は人それぞれですが、一次情報がその一歩目であることは間違いありません。

次世代による次世代のための

武器としての教養 星海社新書

星海社新書は、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて、ここに創刊いたします。本の力を思いきり信じて、みなさんと一緒に新しい時代の新しい価値観を創っていききたい。若い力で、世界を変えていききたいのです。

本には、その力があります。読者であるあなたが、そこから何かを読み取り、それを自らの血肉にすることができれば、一冊の本の存在によって、あなたの人生は一瞬にして変わってしまうでしょう。思考が変われば行動が変わり、行動が変われば生き方が変わります。著者をはじめ、本作りに関わる多くの人の想いがそのまま形となった、文化的遺伝子としての本には、大げさではなく、それだけの力が宿っていると思うのです。

沈下していく地盤の上で、他のみんなと一緒に身動きが取れないまま、大きな穴へと落ちていくのか？ それとも、重力に逆らって立ち上がり、前を向いて最前線で戦っていくことを選ぶのか？

星海社新書の目的は、戦うことを選んだ次世代の仲間たちに「武器としての教養」をくばることです。知的好奇心を満たすだけでなく、自らの力で未来を切り開いていくための「武器」、としても使える知のかたちを、シリーズとしてまとめていききたいと思います。

2011年9月

星海社新書初代編集長 柿内芳文

